

Title	島文次郎先生の思い出
Author(s)	深瀬, 基寛
Citation	英文学評論 (1957), 4: 121-127
Issue Date	1957-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_4_121
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

島文次郎先生の思い出

深瀬基寛

年末に京大英文学会報が届けられた。わずかに六頁のパンフレットながらよほど編集者の頭のはたらきがすぐれていると見えて、過去現在半世紀にわたる京大英文学史の絵入小史といつてもいいほどの見事なまとめ方に感心した。そのなかに堀正人さんの「華水・島文次郎先生の思い出」という慈愛のにじむエッセイがあつて、いまそれをよみ了つたばかりだが、かねて一度かいておきたいと思つていたわたしなりの思い出を早速かいて見る気になつた。昨年厨川先生の思い出をかいて矢野君の還暦紀念論集にのせてもらつたが、いままし島先生の思い出をかかなければ、永久にその機会がめぐつて来ない気がするからである。

こんなに書き出すと、いかにもわたしの秘蔵の重大ニュースでも持ち出すような印象を与えそうだが、そんな心配は一切ない。つまり先生本位に考えれば何ひとつ先生の真価に寄与することのない一片の駄文にすぎなくとも、自分本位に考えてみると、厨川先生の思い出だけではわたし自身の記憶のバランスがひどく片手落ちになつてくるのである。わたしは三高の二年級、三年級と引きつづいて先生の教えを受けたというだけで、先生の学問のなかにも人格のなかにも一度も飛び込んだことはなく、いたずらに粉をふり散らしながら先生の足元のまわりを飛び廻つていた蛾のようなものだが、いまだにはつきり分析できないが、わたしの旋回運動の中心にはたしかに島文次郎という一つの人格がかくれているような気がしてならないのである。

厨川先生からはじめて *denomination* という英語の一字を叩き込まれて以来のわたしのジグザグ・コースは矢野君のための記念論集にかいたが、わたしはどういうわけか、*ineffable* という英語の一字が出てくる度毎に必ず島文次郎先生のことを想う。先生はたしかにひとつの発光体に相違ないが、その光は *denominate* できない光、そうかといつて神秘の闇から雲間を引き裂いてわれわれの魂をおびやかす風雷神でもない。いわば、地上から見た雲の表面はルーミナスだが発光源と雲の裏側ではたして何が起つているか想像のつかないような光であつた。鵬外の聰明からそのインケンサを取つたようなところがあつた。見たところいかにも *irresponsible* のようでおそろしく *responsible* な先生であつた。

三高の二年級で教えていただいた本のなかにウィリアム・ゼームスの「人生は生きる価値があるか」という題のひどくむつかしい論文があつた。それは石田幸太郎さんが厨川先生から習つたという *What is Literature* のなかの一章かも知れないが、わたしもこの本をいまでも保存しているはずである。どうしたわけかわたしはこの論文にひどく熱をあげた記憶がある。同級生だつた湯浅君というのが学校を退学して救世軍に投じたようなことがあつて、この論文の題名からしてわたしにとつては、ただの英語の教科書とは思えないところがあつた。先生の迷惑と同級生の当惑をよそにしてわたしはいろいろ我流の質問を持ちかけた記憶がある。それにたいして雲の裏側からはなんの手答へもなく、ちやうど火鉢で手をあぶる時のような恰好で先生は左手を宙に翻らすだけであつた。右手でチョークを取られたことは二年間を通じて一回もなかつたようだ。従つて先生の英語のハンドライティングというものがどんな書体なのか未だにわたしは知らないのである。ジェイムスが終るとラムのエッセイに代つたが、この方はラムと先生とが板につき過ぎていたためかかえつて印象が残つていない。

三年級の教室で妙なことが起つた。わたしの左隣に坐つていたN君が講読最中に何を思つたのか、着席のままで突然「こんな本は面白くありませんから、変えて下さい」と叫んだ。しかもその本は先生みずからの編集になる「二十

世紀論文集」という丸善版の本で、よんでいた論文は「日と月」というので、むろん川端康成の英訳ではなくて、今でいえば地球物理学入門とでもいえそうな通俗科学入門書であつた。今でも天体にかんする英語を多少でも知つてゐるのはこの本のお蔭である。ところがどうしたものかこの飛入質問にたいして先生はチャリとわたしの方を一瞥しただけで、例の左手をひらりと翻して、「次はH君」と指名したまま顔には不快の色一つ示されなかつた。これはN君の惨敗であつた。

後年先生のお宅へ上つて、たまたまこのときの一件にはなしが及んだとき、先生は犯人を深瀬に極めておられるのに驚き、急いで訂正を申し込んだが、どうやら先生の自信は動かなかつたようだ。しかしわたしの二年生のときのジエームス攻めのわたしの愚問から推論すると、たしかにこのN君の愚問とのあいだには一貫性があるので、強いてわたしは訂正を固執しなかつた。先生の前では固執そのものがどんな学問的固執であれ、何となく妄執になつてくるから不思議だ。そういえば先生からボアの「アッシュャー家の没落」を習つていたころ先生がしきりにボアが偉いといわれるので、そのどこが偉いのかをお訊ねしたところ、「君は哲学をやるのか」との先生からの反問で勝負がついてしまつた。

教室のなかの先生のこととはこれくらいしか憶えていない。日本にはいつのまにか英語の先生の型が出来上つてしまつたが、先生ほどこの型から遠いものは考えられない。先生とくらべると漱石の小説さえもはるかに先生くさいのである。堀さんのエッセイで、先生の御家がらの儒者の背骨をはじめて知つたが、儒には儒の垢がつくという諺も先生にはあてはまらない。趣味人といつて南畝型の川柳の偏向は少しも見られない。たとえば少しトッピーかも知れないが、十七世紀のヒューマニストを形容する「偉大なる両棲の人間」という言葉があるが、その意味でヒューマニストといえる人物の日本の類型が先生ではないかと思う。堀さんをして文字通り十年一日のごとく先生の記憶を毎朝よみがえらせる当のものはまさに先生のこのような特質ではあるまいか。

三高生として先生の慈愛に浴したわたしと同級のK君とが手をつないで東大英文科へ進んだ。或る日丸善の二階の書棚をのぞいているところを思いがけなく背後から猫の足裏くらいの触感で肩にふれるものがある。「君ら本を買うならこれを買いたまえ。」それはヘンダーソンの *European Dramatis* と *Changing Drama* の二冊であつた。二人で一冊ずつ買った。先生はわたしたちを引つ張つて応接室に入り、紅茶を命じ、それから社長に紹介された。それは先生の授業を拒否しようとしたかつての三高生にたいする態度ではなかつた。先生は名刺を一枚出され、何か一筆書き入れて、それをわたしたちに渡された。「ぼくはこんや京都へ立つのでお訪ね出来ないから、これを持つて僕の使いに行つてくれ」と言い残されたまま先生の姿が消えた。宛名は当時の文科大学長の上田万年博士であつた。用件はなにも書いてなかつた。二人は同じ下宿に帰つて一週間ばかりこの名刺を持つてあましたあげく意を決して上野山のガケ下に万年博士を訪ねた。博士は木で鼻をくくつたように「何の用か」と訊かれた。「何の用もありません」と答えた。それからまことに苦しい沈黙が続いて、何ということなしに腰を上げてわたしたちは引き退つた。あとから考えてみると、恐らく島先生の本意は、わたしたち二人を弟子なみに取り扱われ、当時の教育界の大御所に顔合わせをさせてやろうという親切心ではなかつただろうか。わたしは厨川先生がわたしを西田幾多郎先生に紹介して下さつた時の模様をまえに書いたが、この二様の紹介振りはいかにもこの両先生の性格を浮き彫りにしているようだ。

或る年の春休みを京都で送るつもりで西下したとき、右の上田先生訪問の報告をかねて銀閣寺の畔の御宅へはじめ先生をお訪ねした。それもどうしたことか、夜も八時を過ぎていたように思う。あの奥まつた山道を斜めに逸れてお宅の北側の台所とも玄関ともつかない入口まで闇夜の手さぐりで滑りながら転びながら、犬に吠えつかれながら辿りついたときの不気味さを今でもはつきり憶えている。帰りにカンテラで法然院の近くまでお見送りを受けながら両側の並木の説明を承つたような記憶がある。そのほかになんにも記憶がない。

わたしが京都へ住むようになってからはいつでもお目にかかれる気がしてかえつて御無沙汰にはかり打ち過ぎてし

まつたが、何のことでかお訪ねした帰りに、先生は何と思われたか山添いの疎水を渡つてわたしについて来られた。それも先生の横町趣味であろうか、いつのまにか先生が先に立つて当時田甫や畑ばかりだった鹿ヶ谷の盆地をアゼ道づたいに何のあてもなく歩きながら、半分ひとり言のようなことをしきりに話された記憶がある。そのうちふと逆戻りされたかと思うと、例の左手を火鉢にかざすような恰好にひるがえしながら無言のまままで立ち去られた。かんじんのお話は忘れてこんな一瞬の身振りだけが不思議に記憶に残っている。それがまた不思議に先生とお別れするときの記憶ばかりだ。

ある日のこと、先生は裏道から銀閣寺へ抜けてお寺の正面の参詣道を降り橋本関雪邸の前まで来られたかと思うと無言のまま邸内へ入られ、手招きでついて来いという合図をされた。御主人は不在だったが、先生は別に案内も待たない様子で仏壇の間に入り、焼香されてのち故関雪夫人のために長いあいだ読経された。うしろを振り向くと、まるで公園のようなひろい庭園を長身の白鶴が二三羽カッ歩していた。

わたしが洛西小松原へ新居を構えたところお訪ねした或る日のこと、わたしの近くに下宿していた女専英文科卒業の山下さんから聞いたといつて「君はお母さんの隠居部屋を作つたそうだね、存外、感心だね」といわれ、わたしは冷汗を流した。二階建の横に二間の平屋がくつついているのを先生流に解釈しての御言葉だったと思うが、時勢のためとはいえええ当時七十を越した老母を一人郷里に残していることに毎日わたしは苦痛を感じていたからである。昨秋十七年目にやつと母の墓石を郷里に建てたようなわたしだったからである。

その日、腰を上げようとするわたしに命じて、お庭先のツゲの植木を一本クワで起してくれといわれた。「君の庭には一本も植木がないそうじゃないか。これを植えときたまえ」といわれた。それから白水園に電話されて、変に黄色い自動車を呼び、わたしと植木をその中へ押しこみ、「これから君の家を見にゆくん」といわれた。

植木と先生とは無事小松原へ着いたが、かんじんの家内はも抜けの殻だった。わたしはひどく恐縮したが、先生は

「なァに、ぼくはこれから山下君を訪ねる」といつてわたしに構わず、いそいそとお帰りになつた。あとできくと、わたしに代つて山下さんが先生に晩餐を用意して下さいたそうである。

大切なそのツゲの一本をわたしの不注意で枯らしてしまつた。あせればあせるほどその木は痩せ細つて遂に消えてしまつた。それから二十何年、芝生もいつの間にか消えてしまい、その代りに庭一面に苔が生えた。若かつた山下さんも早逝された。

先生がまだお元気だつたころ、京大でローレンス・ビニョンの講演があつた。わたしはビニョンの詩集を机の上に置いて、たまたま島先生とならんで講演を拝聴していたが、講演が終ると、先生は机の上の一冊を取つて講壇に近づいてビニョンの署名を求め、黙つてそれを再び私の机の上に置かれた。その一冊はいまM君の手元にあるが、ツゲの木を枯らしてしまつた今日、近くM君に頼んで、もとの古巢へ収めて貰いたいと思つている。

英文学評論

第一輯

ミルトンの芸術性について

宮西光雄

バトラーとドライデン

山村武雄

シャフツベリの思想の

川田周雄

二重性について

村上至孝

十八世紀の詩論

飯沼 馨

ヘンリ・フィールディング

中野正順

の小説理論について

大浦幸男

エマソンの文体

山内邦臣

イマジズム

高谷 毅

「楡の樹蔭の欲情」断想

池田義一郎

クリストファー・フライ

松木 泉

視覚的表現と分析的表現

小林象三

Perfect の主流

深瀬基寛

On the Pronunciation of

書評を兼ねて

“Amusee” and Secondary

新刊紹介

Stress in General.

英文学評論

第二輯

ウィリアムズと

宮西光雄

「失楽園」の構成

飯沼 馨

フィールディングと

村上至孝

ホガース

中野正順

十八世紀の詩論

山村武雄

劇的独白

角倉康夫

ホプキンズとブリッヂェズ

山内邦臣

人としての

象徴の後退——言語と実在

T・S・エリオット

ノーマン・メーラーの

「裸者と死者」

象徴の後退——言語と実在

象徴の後退——言語と実在

象徴の後退——言語と実在

象徴の後退——言語と実在

英文学評論

第三輯

アイルランド演劇の

山本修二

創始者たち

川田周雄

ポープと剽窃

ドルベンの詩を

めぐつての考察

イェイツの

「最終詩集」について

ロバート・フロスト

の対話詩

天才と女神

の対話詩

Sentence Stress and Prose

Rhythm

御申込み下さい。

御申込み下さい。

御申込み下さい。

御申込み下さい。

御申込み下さい。

御申込み下さい。

御申込み下さい。

御申込み下さい。